燎原

京都の民主運動史を語る会　会報　題字　住谷悦治

会代表　天野和夫

会費・会報代とも年3,000円

〔郵便振替払込〕
口座番号 01060=7=15762

加入者名　燎原社

東寺五重塔　奥田修三　画　1990.11.2

特集「戦後五二年の回想」

佐藤良輔

柴田好人

瀬野尚憲

永原誠

藤原ひろ子

堀江保次

闘争前編　続

田中豊蔵

燎原文芸

会員の短信

秋の例会御案内

私の八月一五日

佐藤良輔

一九四三年一二月一日、私は軍隊にかり出された。父の出身地の関係で秋田市の連隊に入隊したが、いくつかの幸運に恵まれて外地に出ることもなく、敗戦の八月一五日は青森県南部の太平洋岸淋代で迎えた。

「学徒出陣」は、消耗品である下級指揮官の補充が狙いであったが、一時に全国的に大量に入隊させたため養成の予備士官学校が足りず、北海道恵庭の下士官養成学校を転用して旭川・弘前両師団関係の者を入れることになった。私もここに入ったがこれも幸運の一つであった。外の予備士官学校は九月に仮卒業させられて戦地に送られたが、この予備士官学校だけは新設で養成に不慣れだからとして五月から一二月二八日までの期限いっぱい置かれた。おかげで卒業したときには敵潜水艦の封鎖によって一部の千島派遣組を除いて外地へは何処にも行けなかった。

そのほかにも幸運はいろいろあった。入隊後間もなくの時期に特別操縦見習士官の募集があった。受験地は東京・立川というので、数日だけでも東京に行けるという思いで、前後の見境もなく申し込んだ。結果は事前の身体検査でそれまでもその後も出たことがない蛋白が尿から出て落第、もし通っていたら間違いなく特攻要員であったろう。予備士官学校の七月頃だったか、学校から私を含む五人、仙台予備士官学校へ出張を命じられた。詳細は説明なし。自分達だけで汽車に乗れる、という自由の嬉しさだけで仙台に着いてみたら、中野学校の試験であった。長髪で背広の上着に軍隊ズボンという人相の悪い男たちの口答試問を受けて帰ってきたが、その後私に何の連絡もないから不合格であったのであろう。

四四年一二月末に原隊復帰してすぐ、青森県中部の山岳地帯で洞窟掘りの任務についた時、私の所属していた中隊に動員令が下り、その地から戦地に出発することになった。ところが正式編成数より将校が一名多かったので、命令で日頃中隊長に煙たがれていた私が残留となった。これは私が生き永らえた最大の幸運であったが、この時は疎外感と屈辱感で夜も眠られぬ思いをした。

このようにして、本土上陸に対する新しい編成部隊のための陣地偵察に出かけた淋代で、敗戦の日を迎えたのである。

（さとう・りょうすけ　元高教組委員長）

私の八・一五

柴田好人

昭和二〇年八月九日。ソ連軍は突如、ソ満国境東、西、北三方面より、いっせいに侵攻を開始。当時、私は満州電業に勤務、新京におった。身辺の事情は急変した。編成されていた防衛隊も、郊外、南嶺付近の戦車濠構築のために出動。肉体労働の経験のない寄せ集めの集団。それが、重労働の土木作業。八月の中満は、まだ酷暑の連日。汗は大量に流れ、疲れがはげしい。一寸作業しては、休憩、の連続。「あっ、疎開列車」叫びの方向を見ると、長い編成の貨物列車が黒煙を吐きながら、南に去る。「軍人、軍属の家族と荷物だ」。茫然と見送る。

翌日「関東軍は新京を放棄、遠く東辺道（鮮、満国境）山岳地帯に後退。満州国皇帝も同行。」との情報が伝わる。「無敵関東軍」が「同胞を置き去り」にしての退却に、心中怒りを覚えた。

早朝のラジオニュースからソ軍の進撃は速く、先鋒は新京に迫りつつあるように判断された。「新京は無防備都市宣言」をするらしいとのうわさと、その中心が、高崎達之助氏（満州重工業総裁）ということが分かった。関東軍の圧

力が薄れ、民間人の活動の表面化が感じられたが、旧財界出身者には好感がもてなかった。

しかし、非常の時、軍人・役人は無能、無策。海千、山千の商売人出身者でないと、役立たないのかとも思った。

一五日朝、この日も暑そうだ。作業につくため整列していたら、隊長が突然、「隊の解散」を宣告した。隊員は即座に四散した。正午、いわれた通りラジオの前で、天皇の玉音を聞いた。修飾語の多い、奇妙な抑揚の詔勅は、ラジオの雑音も混じって、正確には内容が掴めなかった。しかし負けたらしいことは、理解できた。「いままでの苦労はなんだったのか」体中の力が抜け、涙が流れた。

夜、寮の広間。黒布のカバーがとれた電灯の明るい照明のもとで、みんな集まり、これからどうなるのか、話合った。不安のなかでも、まだ楽観があった。「敗戦の変化は、やがては身辺に及ぶだろうが、緩やかなテンポだ」とは大勢の観測。「満州国」の国家体制は、盤石のように思われたし会社も重要産業だし、急には変化がないだろうとの見方。「何しろ敗戦の経験がないので」が枕詞であった。間もなく一人が、「火事だ」とガラスに映った小さな火の玉をみつけた。それは、急速に大きくなった。「城内の方向だ」。城内は中国人の居住区。外出していたのが、おそくなって帰ってきた。「軍官学校の生徒が蜂起した」と信じられないニュース。日本が一番力を注いで教育し、日本軍と生死を共にするものと信じられていた「国軍将校の卵」が、「日本打倒」に蹶起したとは。盤石と思われた日本の支配が、眼前で崩れて行く。脳天を砕かれたような衝撃。憶えば、私の戦後の新しい一歩は、このときから始まった。「権力とはなにか。人民解放の道は」、このテーマを追って、科学的社会主義の道を歩み続けている。

（しばた・よしんど　京都年金者組合）

燎原の火

瀬野　尚憲

「長年われわれが余りにも沖縄の方々の心に無関心だったことをお詫びしたい気持ちでいっぱいです」という橋本首相の言葉も妙にしらじらしく聞こえます。また「最小限の改正にとどめたい」と云いながら、朝日新聞によると「残酷と首相自らが表現せざるをえない」法案へと後退し、国会議員も親米・反米の踏絵（朝日）とばかり、法案成立に向けなだれ現象をおこしました。国会の先生方のうち沖縄県民に心から惻隠の情を催された方は、どれほどいらっしゃったのでしょうか。アメリカ本土ではできない傍若無人な演習を強行し、あまつさえ非人道的な行為に奔る米兵に、日本国民はいつまで耐えねばならないのでしょうか。まさに国会議員の知性、信念の欠如をまざまざと見せられる思いがしました。諸国から、日本は半独立国家とみなされているのも止むを得ますまい。

基地闘争は第二次大戦とは逆に、アメリカ覇権主義に対する民主主義のたたかいであると私は理解しています。従ってアメリカ国民への呼びかけも、更に強化していく必要があるのではありますまいか。自民党体制も硬直化し、やらずぶったくりだけでなく、腰抜けの政権であることを自ら立証しました。手土産を携えて、いそいそとワシントン詣でをし、国会に諮ることなく重い荷を背負わされた橋本首相の姿が目の前に浮かびます。「民意に逆らう者は必ず亡ぶ」は歴史の原則であり、何れ翼賛体制も崩壊の道を辿ることでしょう。

しかしわたしは日本の将来に絶望しているわけではありません。エイズ問題に端を発し、若者たちの自主的で活発な運動、安保条約を廃棄し、米国と対等の友好関係を樹立しようとする国民の動向、オーム真理教への破防法適用を棄却せしめた世論の結集、今回の最高裁大法廷の画期的判決、民主主義と日本国憲法を生活のなかに生かそうとする幅広く静かな活動、資本主義体制下にあって見事な指針を示している日本共産党の躍進などなど、明るい展望にこと欠きません。これらの精神は紆余曲折を経ながらも、やがては燎原の火となって、日本をいや世界を覆うことでしょう。

（せの・ひさのり　舞鶴市在住）

わたしの八月一五日

永原　誠

四五年の八月十五日正午、わたしは原爆で大破した広島高校にいた。九日に父親の骨を勤務先で受け取ったあとは、いまだに行方のわからない女学校一年の妹を母親と探しまわっていたので、その日も市内の収容所を当てもなく尋ね歩く途中、母校に立ち寄ったのだと思う。

誰もいない、廃墟同然のキャンパスには、それでも「小使い」（用務員）さんが寝泊まりしていた小屋に人気があって、水を飲ましてもらおうと立ち寄ると、同級だがずっと年長の友人Nさんがいた。今日の午、なにやら「重大放送」があるそうなと、どこで聞いたかNさんが言い、「小使室」のラジオを点けた。ラジオが点いたのだから、ひとまず爆心から二キロ余りのこの辺までは電気が戻っていたことになるが、この大時代物のラジオは雑音ばかりで、ほとんど一言も意味のある言葉は聞き取れなかった。

それでもどうやら戦争が終ったらしい、ということはわかったようだ。Nさんが「ああ、終ったか」と半分自分にむかって言い、「ええ」とわたしが相槌をうって、あとは黙って二人で炎熱の戸外を見やっていた。

感慨がなにも湧かなかった、といえば嘘になる。これで兵隊に行かなくてすむ、と頭のどこかで声がしたのを覚えている。身体虚弱で体力人に劣る子供だったので、「入営」は物心ついて以来のわたしのひそかな悪夢だったのである。だが本当のところ、わたしたちにとっては、戦争などもうどうでもよいことだった。Nさんは家と母親を失っていたし、わたしには妹の生死のことしか念頭になかった。戦争が終るどころか、戦場のど真ん中に身を置いていたわけである。三日後に妹が似島の収容所で死んだと知らされ、つづいて母親を急性原爆症でなくしたあとも、わたしを筆頭に残った四人の子供がどう生きてゆくかという切実な問題があった。わたしが十五年戦争のことについて考えはじめるには、正直あと六年が必要だった。

おまえの人生の原点はどこにあった、と自問する年頃になって、しきりと振り返る五十二年前の体験である。戦争という巨悪にたいして、わたしは完全に無力で、おまけに受け身だった。この半世紀、このことの反省がいつもわたしにあったと思う。戦後政治というもう一つの歴史的巨悪にたいしては、意気地なく被害を「受忍」しない態度で人生を終えるつもりだ。

（ながはら・まこと　立命館大学名誉教授）

回想

藤原ひろ子

「Fくーん、Fくーん」闇の中をいくつもの小田原提灯が飛び交いました。

あれは昭和十九年（一九四四年）。男子は戦場に狩り出され、教員不足を補うため女学校五年生の三学期は師範学校で臨時教員が養成されました。そしてセーラー服を脱いだばかりの少女に「京都市立翔鸞小学校助教を命ずる」の葉書が届きました。先生になって翌年の四月には、空襲を避けるための学童疎開が始まりました。引率教員の殆どは独身女性。私も三十人の子供の責任を担い丹後山田（野田川町）の福寿寺へ集団疎開しました。

或夜中のこと。子ども達の部屋を見回るとF君のふとんが空っぽでした。まっ暗な本堂も、縁の下も、便所の壷までも必死で探しましたがF君はおりません。

ハッと思い当り応援を求めて外へとび出し線路づたいに走りました。

どこまでも伸びる線路が月の光りに銀色に鈍く光り、その先を黒い小さな影が動きます。「Fくーん、Fくーん、」と叫ぶと、私の胸に小さな影が勢いよくかけ込み「先生！」とむしゃぶりつきました。F君は「線路をつたってずっ

とずっと行けばお母ちゃんに逢える」とこぶしを握りしめ一心不乱に歩いていたのです。

いつも空腹。大豆入りごはんで下痢。毛じらみでイライラ。すり切れたわら草履で足が痛いと泣く子。灯が制限されうす暗い部屋。夕方誰かがシクシクすると部屋中涙の大合唱。私も泣きたいのをじっとがまんしておりました。親と子を引き離し子供達をこんな切ない思いにさせる戦争はもうごめんです。

あれから五十二年。F君は白いものが混じる六十才。不況の西陣で糸染業。息子に後を継いでもらいたいと伝統産業に励む毎日です。

私は「サイタ　サイタ　サクラガサイタ」「ススメ　ススメ　ヘイタイ　ススメ」の国定教科書で、軍国主義教育は骨のズイまで沁み通り「撃ちてし止まむ」「ほしがりません勝つまでは」を信じ込む軍国の乙女でした。

「教育」はいつの時代も人間を創る。その方向を誤れば国は滅びてしまいます。

神戸児童殺害事件は、十四才の子供をここまで追いこんだ背景は余りにも深い闇です。

私が信じ込まされた無批判、無抵抗の軍国主義教育と、今日子どもに現れる教育政策の矛盾は根っこで共通していないでしょうか。

「子どもたちは保護されるとともに権利の主体である」ことを肝に銘じたいと念じます。

（ふじわら・ひろこ　元衆議院議員）

戦後五十年の懺悔

堀江　保次

十一月二十三日戦争の不条理をみつめるとして、熊本出身の浜田智明氏の全容展が伊丹市の美術館で開催されるとの新聞記事に目を通した。その記事の中で私の体験と同様のことが記されてあり読み返した。

浜田氏は四十年から四十三年迄、一兵卒として中国大陸に渡り、軍隊の不条理と凄惨な光景に出会い、そのいまわしい体験が氏の戦後の方向を決定されたと記されている。

更に記事には、下半身が木の棒でつきたてられ荒野に転がる女性の死体、装備の重さに絶えながら行軍する兵士たちとぐにゃりとゆがんだ太陽。暗い室内で、銃口をのどにあてがい左足の指を引き金に置いて、死を急ごうとする兵士、戦争に対する声高な告発や抗議というよりは人間の愚かさ、弱さに対する深い悲しみだ。

以下省略

一九四四年二月十一日、私は現地応召となり中国の前線で、内地より派遣された初年兵教育にあたった。時には初年兵というよりは、徴兵検査で不合格となり応召をされた補充兵である。

内地で全く訓練を受けていない又、年齢も年上で若い現役兵の兄か、父に相当するような兵である。時には討伐にも参加し、その合間を見ての軍事訓練である。その中で起きた出来事です。

教育中のAという兵が行方不明との報告を受け、中隊中くまなく探したがAの姿は見当たらない。敵前逃亡かもしれないと思ったが、私は野外の便所を思い出し点検してみると、Aは便所の中で、荒縄で首をくくりあわや自殺寸前であった。私は思わずAを引っ張り出し、その時私がAに言った叱責の言葉を今も忘れることが出来ない。

「貴様、天皇に捧げた体を何と心得るか…。自分一人の体と思ったらお大間違いだぞ…。」下士官室につれ帰り、さんざん絞り上げた。

その後Aは野戦の軍隊生活の苦しみの中で、再び銃で自殺を計ろ

うとしたがそれも助教の私に見つかった。

野戦での初年兵教育を行った中での出来事であるが、Aは天皇に捧げた体であろうが何であろうがもともと軍隊に、まして、戦場に耐える健康な身体ではない。

やがて敗戦となり、警備地より引き上げるのだが結集地までの八路軍との激しい戦闘のなかで、集結地に着いても、敗戦後といえども厳しい生活の中で補充初年兵という差別重圧の中で、体力つきてAは病死する。

紙上の事もあり、充分な事を書き表すことは出来ないが、その教育にあたった助教として又、戦闘中分隊に所属したAに対して、上官として私の取った態度はどうであったか、もう少し軍隊とは、戦場とはいえ心からAをかばうことは出来なかったのか。戦後五十年経る中で私の苦しみとなっている。

Aの冥福を祈るこんな言葉で許されるものではない。心より懺悔と告白して、詫びる私の気持ちが通じてほしい思いでいっぱいである。

（ほりえ・やすじ　中郡峯山町在住）

闘争前編続

田中豊蔵

六、山宣の当選

大石橋の事務所は、山本宣治先生当選の拠点になったのです。昭和三年（一九二八）二月の京都二区の選挙は今までとちがって普通選挙でした。

始めて労農党の山本宣治を当選させたのですが、皆んなは本当に不眠不休の運動でした。

この選挙で京都の労農党は一区で水谷長三郎、二区で山本宣治をだして大成功でした。この時全国的にも無産政党は、鹿児島で冨吉英二、福岡では八幡製鉄闘争で有名な「熔鉱炉の火は消えたり」の浅原健三、岡山では黒田春男、滋賀では矢尾喜三郎、東京で安部磯雄、宮城では鈴木文治。全部で八名の議員を当選させたのでした。

山本先生の当選には労働者農民、学生も

〃しいたげられる民衆の〃

を歌い朝な夕なの活動で偉大な力を発揮しました。

亀岡の農民組合や桂の農民組合の奮闘振りはおどろく程のものでした。宇治方面の労働者農民も政治的に大きく目ざめていたのです。南山城の堀芳次郎、綴喜の坂本兵蔵・小野治三吉、また八幡の闘いは山本先生当選に大きくつながりました。

南山城一帯は奈良電の社長長田（おさだ）桃蔵が候補者でこれとの一騎打ちでした。労農党は死者ぐるいで肉迫し、農民は至る所で集会を開きました。宇治は大会社の工場労働者が支持してスバラシイ運動が展開されました。これが山本先生の当選に結びついたのです。

泉隆君も地下足袋でよくあるかれ、広い二区をかけめぐられたのです。堀芳の活動もおとらぬ奮闘振りでした。

七、三・一五うらみの日

昭和三年（一九二八）三月十五日、京都府特高課は労働組合、農民組合、水平社、学生社会科学の活動家や幹部を検束しました。治安維持法による日本共産党の弾圧事件でした。私は、京都で検束された皆さんの差し入れをするため東九条から佐々木駒蔵と私、上京区から西陣織物組合長の辻井民之助、佐々木民三郎、染物労組より組合長の増山さん、陶磁器の坂本時三、原田栄吉、山田、生永徳松など十三人がタオル・石鹸・歯ブラシ・落し紙などを差し入れに警察に行きました。

堀川署が一番多くやられていました。斉藤英三、臼田英雄、池上利二外五・六人とのことです。警察は仲々差し入れを許しません。坂本時三と辻井民之助が代表で交渉しました。

すると特高課の巡査部長細見が首実験に出て来ました。頭数をかぞえていきましたが私を見るなりすぐ引きかえしました。そしてまた出て来ました、私はピンと来たので一寸座をはずしました。

「今ここにおったのは梅小路で働いている田中だろう」

と佐々木駒蔵君に聞いたそうです。

「そうだ」

と佐々木が答えると

「しまった」

といって又中に入ったそうです。

あとで佐々木君に聞いたのです。

私は、これはあぶないと思って直ぐ家に帰り父母に急を知らせて東七条の部落の友人の家にしばらく世話になりました。水平社支部長であった津村栄一氏の兄さんの家は大きな家でした。塩小路河原町東入三軒目です。私はめいわくがかかればと思いお礼を述べて又出ていきました。そして友人の家を点々としてまわりました。五・六日すぎた所で私は家に帰りました。

明日は仕事にいくと言って父母を安心させ家で寝ました。夜が明けて朝七時前、梅小路駅に仕事に行きました。二条方面の薬問屋の荷物運搬をして昼飯に帰りました。梅小路駅前には、堀川署の交番があります。刑事が五・六人おり七条署の特高課員がおります。

「オイッ田中、貴様をこぼしていた」

「すぐ七条署へこい」

と言いました私は運搬の牛がいるから、どうにもなりません。刑事は

「家まで行くから、早くしろ」

刑事は東九条の私の家までついて来ました。そしてすぐ七条署員が私を検索したのです。

梅小路の駅から私について来たのは堀川署の細見巡査部長、七条署の特高課の山本・飯田・福原の三人でした。

私は馬車をかたずけ、父母にわけを話して七条署にいき、二階の特高課で小寺卯一警部・中原巡査部長に取り調べられました。住所・姓名を聞いて直ぐにブタ箱です。

ブタ箱は一号室、二号室、三号室とありましたが私は二号室でした。二号室は満員です。十二・三人入っていました。色々の罪をもった人々で一杯、入口で私が入るとバッタリ出て来たのは、あとでわかったのですが、社会科学研究会の委員長石館直三さんです。石館さんは貴議院議員の長男で、毛布を置いていかれたので大変助かりました。ブタ箱は板の間でゴザはやぶれ、ちぎれちぎれになっております。本当に酷いもんです。たった三帖の間に十二・三人で押し合いこんぼでした。

（以下次号）

（たなか・とよぞう　中京区在住）

燎原文芸

一九三三年六・二〇を思い起こし三首　近詠三首

黒住嘉輝

幼児ら帰りきたる湯槽には
二三日小さき砂粒残る

孫娘ほどの歯科助手に
こまごまと歯みがき指導と
いうを受けおり

若き日に思いみざりき
「もう帰らぬあの日」
重ねて人は生きるを

一九九七年退院のとき

西村コケモモ

ぼろ笠をかむりしあとの右眉毛
米寿にちかいいまだ揃わず

山裾の牢屋の夜の底冷えに
牡丹雪の音つもる音する

チェンと一声雀の長の合図あり
ざわめく屋根の雀羅多忙

投稿歓迎

詩・短歌・俳句・狂歌・川柳なんでもかまいません。ふるって御投稿下さい。

○会員短信

奥田修三氏のご逝去に慎んで哀悼の誠を捧げます。湯浅貞夫氏につづいて古い事を語り合う知友の永逝は淋しいことです。

「燎原文芸」の恒藤恭訳『マルクス主義の根本問題』（プレハーノフ）は十代の僕の必読書でした。今でもあるかも知れません。芥川龍之介の親友でした。

国立市　戎谷春松

御案内

秋の例会　京都の民主運動史を語る会

★とき　十月四日（土）　ごご一時半～四時

★ところ　ハートピア京都　四階　第五会議室
☎二二二―一七七七（地下鉄烏丸線丸太町下車）

★お話し　稲田達夫さん
蜷川民主府政時代の京都府出納長
「蜷川民主府政二十八年を語る」

★メッセージ　森川　明さん
「府民本位の新しい民主府政をつくる会」代表幹事

★入場料は無料です。
（なお会場の都合で、車でのご来場はご遠慮下さい）

会および会報については、左記へご連絡ください。
〔事務局〕
〒六〇五　京都市東山区今熊野南日吉町三九
奥村和郎
TEL FAX　〇七五-五六一-七四八五